

第2回山形県新博物館基本構想検討委員会の概要

1 日時

令和6年11月25日（月） 午後3時30分～午後5時00分

2 場所

山形県庁2階講堂

3 出席者

出席者名簿のとおり

4 会議の概要

- 資料1に基づき、新博物館基本構想基礎調査業務委託事業者から基礎調査の中間報告について説明した。
- 資料2、3に基づき、事務局から基本構想検討において重視するポイント（以下「重視ポイント」）等と基本構想（基本理念）について説明した。
- 各説明を踏まえ、基礎調査の進捗状況やとりまとめに当たっての留意点、「重視ポイント」や基本構想の基本理念について各委員から御意見をいただいた。

【各委員からの意見】

■結城委員

- ・ 新博物館の目指す姿の「②集めてつなげる山形のこれまで」について、農業においても山形を語る上で最上川は外せないと考える。豊かな自然を背景に成立した食文化は山形らしさと言える。
- ・ 内陸の食と庄内の食は違う。内陸の人は庄内のことをよく知らないし、庄内の人は内陸のことはよく知らないなど、知る機会が限られている。最上川でつなぐことで県民としてもより深く理解できるのではないか。
- ・ 山形の自然と共存しながら先人が積み重ねた歴史そのものが山形らしさであり、例えば、四季折々の恵みを生かした漬物等の保存食などの食文化がある。山形県民は「(ひょう等の)雑草を食べる県民」として知られるほど、独自の食文化が発展してきており、財政難など先人が様々な苦勞を乗り越えようとしてきた結果、伝統食につながっている。先人たちの知見や努力の積み重ねの凄さであり、価値を実感する。新博物館では、県民だけでなく、海外まで新しい価値を発信していけるとよい。
- ・ 伝統食や食文化の継承には女性の力が大きく関わっている。なかなか記録には残らない女性の歴史だが、多様性やジェンダー平等を踏まえたインクルーシブな博物館を目指す中で、その部分にも光を当ててほしい。
- ・ 小中高の出前事業をやっているが、教室での授業は、伝えられる内容に限界がある。農場で体験することが一番良いが、博物館において体験型展示やVR・映像等を用いることで、子どもたちにとってよりリアルで楽しい学びの場となることを期待している。

■松永委員

- ・ 他県における持続可能な博物館の設置例調査は、4つの視点で見ているが、持続可能という点では、データベースなど「情報」の視点があっても良いのではないか。
- ・ パターン別事業費シミュレーションには、建設後何年経過している博物館なのか、という観点が欠けている。ここ10年くらいで見えていくと、施設の構成要素が変わっているはずであり、それも踏まえて考えたほうが良い。また、LCC（ライフ・サイクル・コスト）も重要。30年、40年程度の維持管理経費がどのくらいかかるのかを意識するべきである。
- ・ 「重視ポイント」が新博物館の目指す姿と合っているかどうかのチェックが必要である。①に「持っている力をしっかりと発揮」とあるが、基本理念に掲げる博物館を目指すうえで、30万点の資料には足りているものと足りないものがあるはずで、足りないものをどのくらい集めていくのかを考える必要がある。
- ・ 持続的という人と人材育成を考えなければならない。館内で働く人と来館する人の両面から構想内容を充実させたほうが良い。
- ・ 博物館の中だけでは、すべては完結せず、フィールドに出ることを考えるべき。分館か、他館との連携を検討するかによって必要な面積や土地の前提も変わってくる。
- ・ 博物館に寄りやすい環境、訪れるきっかけをつくるということが大事。例えば道の駅など観光バスが立ち寄れるような場所との連携も視点として持つべきである。

■卓委員

- ・ 他県における持続可能な博物館の設置例調査の4つの視点のうち、「連携」は「人・もの・コスト」をつなぐ部分にあり、階層的に違うものを指しているのではないか。また、長崎歴史文化博物館の事例は、ボランティア活動が特徴的で、例えば寸劇を行うボランティアなどが注目される。地域アイデンティティがどのように育てられたかという点で参考になる。
- ・ パターン別事業費シミュレーションでは、高水準の展示をはじめ、デジタルの展示技術を活用する場合には、維持管理費が必要な情報になると考える。
- ・ 「重視ポイント」にも繋がるが、博物館に現在納まっている資料を整理する予定はあるのか。収蔵庫は無限にはないため、今一度整理してどのくらい、どのような資料があるのかを見直すべき。
- ・ 学校連携を事業の中心に置くか置かないかで、学校に対応する専門スタッフを置くか置かないかが変わる。展示だけで全て対応するのではなく、教育プログラムで補うことも考えていかなければならない。
- ・ 滋賀県民にとっての琵琶湖のように、最上川をキーワードにする点にはじっくりくる。4つの地域の繋がり希薄さがあるように思われるため、山形県内で共有できるストーリーがあると、一体感がつくられやすく、最上川が食文化や自然・歴史をつなぐというところはイメージしやすい。
- ・ 博物館は県民に向けて山形らしさを見せるのはもちろん、博物館という場で県民と一緒に発見するとか、未来に向けて山形らしさを創造するという点も必要。そのためには、10年間の準備期間中に博物館の支援団体やボランティアなど、博物館と一緒につくっていく環境を整えると良い。

- ・ 博物館が観光、農業などの産業や地域経済の循環の一員に入っていることを強調すると、博物館の持続可能性という点も見えてくる。
- ・ インクルーシブの視点から地域の誰もが博物館を使うことができるのはもちろんだが、加えて、博物館から外に出ていく姿勢で、地元企業や学校など様々なところから博物館を活用してもらえたいことを目指していくことも大事である。

■佐藤委員

- ・ 「重視ポイント」に「7分野をしっかりと保存、しっかりと活用」とあるが、活用には、調査・研究がベースにあることが大前提であり、今の課題に対して何ができるのかという点が重要である。
- ・ 分野の括りは7分野で良いのか検討する必要がある。例えば、食文化を7分野で語れるかという点では、7分野の中に食文化の資料は入っているので、そこから抽出していくことが大事であり、それがしっかりと活用するための研究につながっていく。また、今の県立博物館の資料には美術工芸に属する資料が含まれるため、そういったところにも焦点を当てて、研究し活用していくことが大事なので、7分野の30万点は前提だが、より広げていく視点が重要。
- ・ 全体的に「博物館が見いだして発信していく」というスタンスであり、主体的に学ぶ市民の姿が見えない。共に学び新たな価値を想像していくことが博物館の使命であり、使命のために五感を使った教育やフィールドを使った体験を検討するべき。今は一方的に博物館が伝えるという言い方になっている。
- ・ 文化財の日常防災に関する検討会や、被災した新庄市ふるさと歴史センターの支援を行っている立場から見ると、防災は県が全部やるのではなく、皆でやらないとできない。もちろん県立博物館には中核の大事な機能を果たしてほしいが、皆で一緒にやっていくという視点を入れてほしい。

■河野委員

- ・ 他県における持続可能な博物館の設置例調査の「人の視点」で、事例と要点案に差がある。事例では、組織的な対応を行っているものもあるが、要点案としては「職員の専門性向上」に限定されており、十分にまとめきれていないのではないかと。
- ・ 過去事例からわからない部分、ヒアリングでは聞き取れない部分として、前回の委員会で発言したのがガバナンスの部分。経営と学芸が相互に見あっていくようなガバナンスが重要。これは基本構想に入るよりは、運営に当たっての基部になる部分だが、こういう視点がないと、運営そのものの検討ではなく、PFIか指定管理か、などの手法の検討に留まってしまう。
- ・ 施設環境やコストの関連で、移転先を検討し、事業費を試算していくに当たり、世界的な潮流でもある環境負荷や環境配慮という話が必ず入ってくるため、その想定が現時点のまとめの中にも入っていると良い。
- ・ 「重視ポイント」は漠然とした印象を受けた。展示なのか研究なのかどちらでも読めるような書き方になっている。全体的に展示寄りのイメージのため、収蔵・保管・研究でそれぞれ何を重視するのかを検討した上で「重視ポイント」に収斂していく方がまとまるのではないかと。

- ・ フィールドとの連携や他館との連携、研究者の拠点というような連携の中核となる拠点性に関する記載もないため、その点も検討すべき。
- ・ 今の「山形県立博物館が持っている力」が何なのかについて整理されていないので、その先を考えにくい状態になっている。博物館は各地でそれぞれ特徴的なものを持っている。山形県博が持っている力や強みは、中から見たものと外から見たものでは違ってくる。内部環境と外部環境のプラス面・マイナス面を洗い出し、現在の山形県博がどの位置・役割にあり、今後どんな施設になることを目指していきたいのかを考える必要がある。
- ・ 新博物館の目指す姿について、山形らしさは否定しないが、来館者のニーズと必ずしも合致しない場合がある。誰に対しても60点、65点のものをつくっても誰も楽しめないものになってしまうので、ターゲットを想定して緩急をつけることを検討すべき。県立博物館が今持っている力や県内全域の特徴や強みなどをきちんと整理することで、誰にとって訪れやすい博物館を目指すのかが見えてくるため、今後の整理に期待したい。
- ・ 新博物館の目指す姿のキャッチフレーズをつくる検討方針として、博物館の内部に向けた言葉と外に向けた言葉を同じ1つのものとするのか、もしくは内部に向けた言葉は具体的かつ堅いものとしてつくり、外に向けた言葉はかみ砕いてつくる、というような2つのパターンがある。内容は今後検討するにしても、言葉の作り方が変わってくるため、どちらのパターンにするかの方針を先に決めることが先決。外向けではロゴマークを作る事例、キャッチフレーズの一部分を場面に応じて変えるなど拡張しながら広報していく事例などがある。

■栗原委員

- ・ 他県における持続可能な博物館の設置例調査の長崎歴史文化博物館の事例で、学芸と事務方の働く場所について記載があるが、良好なコミュニケーションを図るためには隣接している方が良い。また、独立行政法人だと事務方もプロパーだが、行政だと人事異動があるため、学芸員と事務方とのパワーバランスが同等にならない。職場を隣接させることに加えて、プロパーのような事務方も養成していくべきである。
- ・ 五感を使った展示は重要だが、知覚過敏の子どもたちもいるため、センサリーマップで案内するような工夫も必要になってくる。どうしても五感を使うことに意識が向くが、使わない視点で考えることも大事である。
- ・ 学校連携・他館連携について、県立博物館がリーダーシップを取っていくことをもう少し強調してほしい。
- ・ パターン別事業費シミュレーションで試算している面積について、現時点では机上の計算ではあるが、平均値以上の面積を目指していくという視点は重要。一方で、立地が決まり次第、さらに広い面積についても検討してほしい。東北一の博物館の気概を持って進めてほしい。
- ・ 収蔵庫調査の検討課題に記載があるが、年々寄贈のスピードが増えている。最低20～30年、余裕を持った面積の設定が必要。場合によっては収蔵展示も検討すべきである。
- ・ 小中学校教員調査について、立地決定後になるが、離れた地域の子どもたちにどの

ようにアウトリーチするののかという視点も必要。例えばデジタル技術、または移動博物館などの検討も必要で、その際は教育担当のエデュケーターの設置も検討することが望ましい。

- ・ 現代の子どもたちは、普段からデジタルに触れているため、博物館には実物との触れ合いを求めているとの研究報告がある。一方、実物だけでは分からない部分もあり、デジタル化と実物のバランスを検討する必要がある。
- ・ 先日のニュースで、山形県は創業 100 年を超えた店舗が国内で 2 番目に多いと聞いた。温泉が多いため旅館業が栄え、酒蔵などは最上川の舟運とも関連しており、自然環境の良さと食文化が結びついている。そのため、そういった部分を重視した展示とすることはもちろんだが、「見る」だけではなくカフェやレストランを付帯施設として整備するなど「食べる」というところも重視してほしい。
- ・ 30 万点の資料を前提に議論しているが、無形民俗文化財をどう扱うかを考える必要がある。関連した実物資料もあると思うが、無形の資料にも視点を広げてほしい。
- ・ 子ども達の学びに資するのは大事だが、今後ますます高齢化が進むことから、お年寄りに優しい博物館も視点としては考えてほしい。

■小川委員

- ・ エデュケーターの配置は重要なので、人材の養成を考えてほしい。
- ・ 博物館の DX として、デジタル・アーカイブなどの資料に関わるデジタル化に加え、マネジメントのデジタル化をしていかなければならない。
- ・ 他県における持続可能な博物館の設置例調査は、「もの・ひと・コト・場」を取りまとめる「経営・ガバナンス」について調査が必要なのではないか。例えば、博物館の運営方法、PFI、指定管理、また、職員の働き方などが調査対象になる。
- ・ 人材養成については、学芸員だけではなく、来館者をどう育てるのかを考える必要がある。博物館のあり方を人々に示すことを「博物館文化」というが、一般の人は普段、展示の見学とプログラムへの参加くらいしか関わらないが、その背景にある資料の収集や調査・研究などを知ってもらうこと、博物館文化を知ってもらい、興味を持ってもらうことが重要で、そのための人材養成が大事である。
- ・ 「連携の視点」が出てくるが、何のために連携するのかという目的は、なかなか調査では出てこない。最終的には「重視ポイント」に文章で加えていく必要がある。「博物館は資料を集めるところだ」ということが一般に理解されていない。何のために集めて、何のために研究しているのか。その答えがわかってくれば収蔵庫の必要性についても回答できる。子どもの学びに関しても、例えば将来的に山形県の文化の創造や継承をする県民を育てるために学んでもらうといった議論があるべきであり、入館者数も大事だが、質的な部分をしっかり見ていく必要がある。
- ・ 「博物館の目指す姿」にある県民と一緒につくっていく「開かれた博物館」の視点については、県民の主体性、博物館に対する興味関心、活用していく能力を高めていくことに加えて、それらを博物館の運営にも活かしていくことが重要である。

■伊藤委員長

- ・ 最上川が強調されているが、山形県は山と川と海が三位一体になっている。出羽の

国が 712 年にできた。庄内では別の開拓が進んでいた一方で、内陸の村山や最上は陸奥の国の管轄であった。その 2 つを合わせた場所が出羽の国であり、その 4 地域を結ぶのは最上川であり、国ができることから決定的な役割を果たしている。国府がある酒田に向けて、最上川沿いに道路ができ、人やものが集中するようになったことを踏まえても、山形の 4 地域の歴史・文化を伝える上で最上川は決定的な役割を果たしてきている。

- ・ 配布資料「水を一杯飲みたく候-最上義光の山形への愛着-」を水の大切さを示す資料として提示したい。最上義光が、秀吉の朝鮮出兵のため、肥前名護屋に赴いた際に「早く山形に帰って山形の土を踏みたい、あのうまい水をいっぱい飲みたい」という本音が出ている。最上義光にとっては、うまい山形の水が山形への愛着を一層かき立てたのではないか。山形の水の大切さの一例である。
- ・ 今後は、教育委員会と連携し、博物館について勉強することをカリキュラムの中にきちんと入れることを検討してほしい。博物館での教育に熱心な教員がいなくなると、連携が切れてしまうことになるため、教員個人に左右されない恒常的な連携を作してほしい。
- ・ 遠足等で博物館を訪れる子どもたちに対し、前もって連絡してもらえれば、その地域の資料を展示しておき、子どもたちが生活する地域の歴史文化を総合的に学べるような工夫もできるのではないか。
- ・ 収蔵庫は、新博物館の収蔵庫を単独に考えるのではなく、現在、県が持っている書庫、図書館、公文書センターなどの収蔵施設の横の連携が必要。収蔵資料は増えていくため、本来あるべき収蔵の理想の姿を描いた上で、場当たりの収蔵庫を拡大するのではなく、公文書館の設置も含めて大きな展望を持って考えてほしい。また、市町村の収蔵能力との連携を考えながら規模や範囲を考えてほしい。

以上